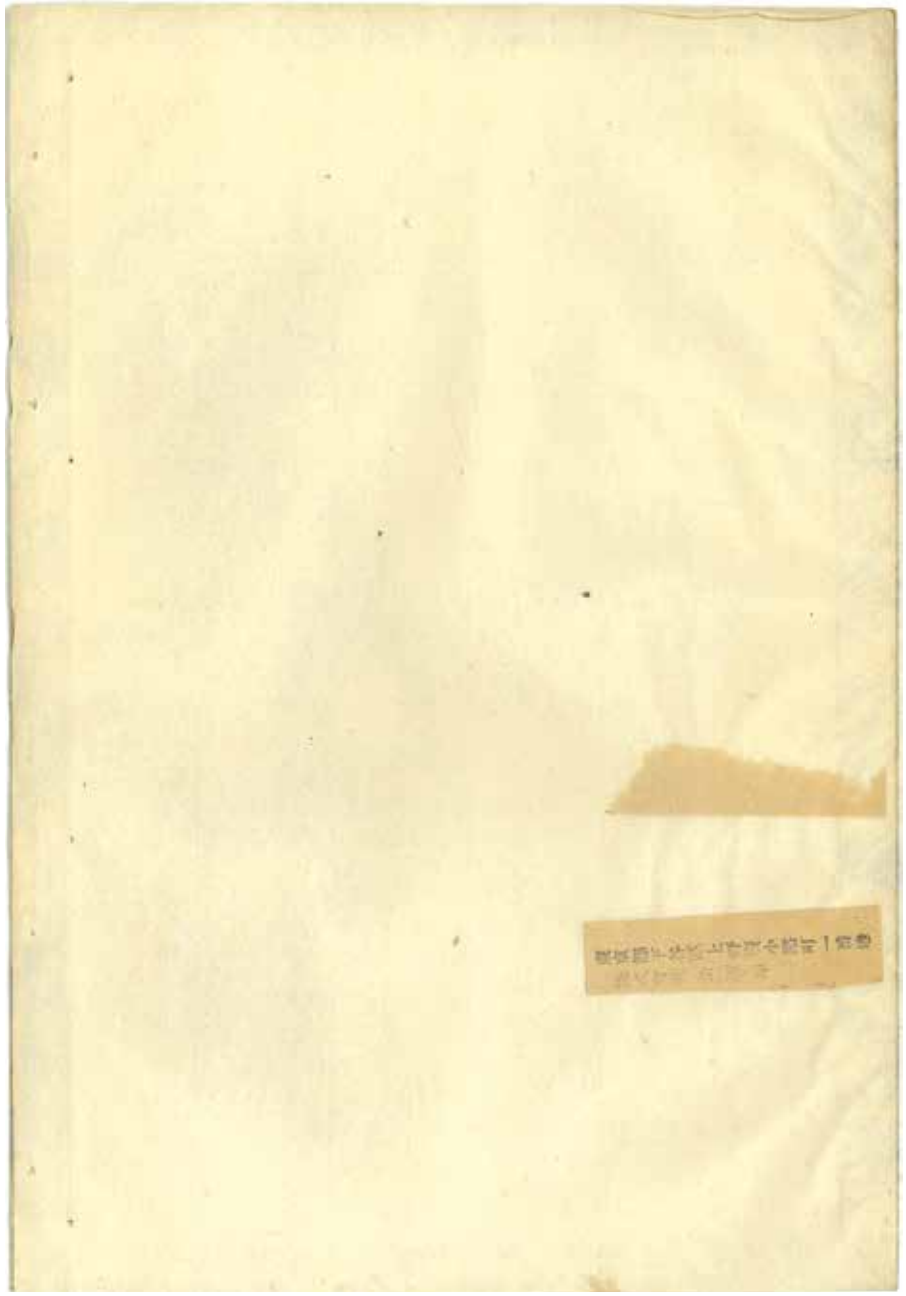
〔表紙裏面〕



〔表紙〕

五行分

十枚

妻の手紙

葛西善藏

玄関のすぐ上の六畳で、人の出入り、電話の聲なども手に取るやうに聞えて、かなり騒々しい部屋だったが、その代り、向い合いの部屋もなく、隣りも（へきま）った下宿人は居ずに、主に一晩泊りの客などに使っているので、自分のやうに遅くまで酒を飲んだり、また、

つとよだったり、飲み客も話相手くらいないんだから、それに東向きで日当りの具合いはよし、自分等には都合のいい部屋だったんだが、ついこの五六日前の晩、初めて訪ねて来た客と酔った上で喧嘩をして、眼鏡を割られて上瞼に傷をし、一寸のところで眼球一つどうかするところだった。えんえんことから、いとく意を廣ぶして、丁度裏の方の畳屋が明いたのを幸い、帳場に頼んで、（すぐ）部屋を換へて貰（きし）ってとにした。一等端の部屋で、西日が部屋い

つぱいに射し込むのが難だが、窓の外がすぐ他所の廣い庭園になつてゐて、夾竹桃や楓の新葉が美しく眺められた。寢床二つ並べて敷く蒲團さえ我慢すれば、かなり暮に入つた部屋だつた。

行李一つ持たない、それも、部屋を三つほど置いて、同じ廊下を夜具や机や火鉢など、そつちやりなものを運ぶだけなので、二時間もしたら、すつかり片附いた。

「隨分暮に入つたね。こゝだと忙がしい時や

酒など飲んでゐる時、人を断はることも出来るんだが、あの部屋だと、何もかも聞えるんでね。これからは、酒でも飲んでゐる時は、大抵の人は断はることにしよう。お寺でいとりでばかり飲んでゐた時とは、だいぶ勝手が違ふやりだから、懲りたよ。やつぱし東京は怖いね。

それに十三日だつたものな。親父の命日も忘れて、酔拂つて喧嘩なんかするもんだから、罰が當つたんだな。こゝそれでは、本屋へ行つて来い。ちつともきまりの悪いこと

なんかないよ。何うの云い値でいいから、いつしよに判こ取りに伴れて来い。四五円にはなるだろう。それで、マーケットへ行って、その帶を買つて来たらいいだろう、ここ」

場所寒げの古雜誌や四五冊の古本の包みを拾えて、おせいは近所の古本屋へと出かけて行つたが、間もなく帳面を持つたお婆さん産婆につれて来た。四円五拾錢と云ふことだつた。帳面に金額、居所姓名を書き、認印を押して、五拾錢銀貨を出して、小僧さんの手から五円の紙幣を渡された。

近くの本郷一丁目の三越マーケットに、半幅の本錦帶が賣つてるのをおせいはいつか見て来て、前からほしがつてゐたので、今の金を渡して、買ふ不自由をしていにやつた。おせいはいそ〳〵と出て行つた。

ケチの附いた眼鏡の金蔓はその翌日古道具屋に賣拂ひ、丸ビルの眼鏡院で正確に度を計つて貰つた。これを機會に新しい代りの眼鏡も翌日出来て来て、その顯具合がたいへん

いいし、半年経ち新すやふかしの押入れの整理も出来、狭いながらに纏った感じの静かな部屋の机の前に座って見ると、自分なりすっかりいい気分になった。で、さっき手鞄を開けた時にあと見出して、何ということなしに机の抽斗の中に入れた、小さな粗末な焼物の香爐と三角形をした青い煙香の代箱——鎌倉のお寺の坊さんに貰ったのだが——もれを取出して、机の上に、三つ四つと立続けに焚いて見た。暫うした午後の部屋の感じとは、また此頃の自分の生活気分とも、一向親しみの無いやうな匂ひではあったが、微かなかうもうちつと自分の生活気分を弾めなければなりないと云ふ、示唆を感じさせられて、いい気持で自分はその煙りに視入った。

「夢はもうなかったわよ……」

おせいは暫うして、ひどく失望したやうな、テレたやうな、を浮べて、ほてった赤い顔して帰って来た。

「ほう、それではみんな夢れすまったんだよ」

「ずいぶん」あんなとこでは、品物を取替えるんでせうよ」おせいは店員にでも訊いて来たらしい。

「やっぱし、せい公に運がなかったんだよ。それではこの次きに買ってやるから、僕にその金を使はして呉れないか。刺刀を買ひに行って来る。顔が変になって仕様がないから」

喧嘩の晩に、どうかしたのか、刺刀が紛失したので、それ以来五六日顔を出さないので、

[illegible]

[illegible]に成って、この場合それだけが、自分には不足なものだった。床屋へ行くのは臆劫だし、金の出来るまで辛抱しようと諦めてはおれなかったが、おせいからそんなことで帰って来たので、自分はもう我慢がならなくなった。今度は自分の方からその金を持って、いえ、と、以前から刺刀や革紙など、幾本か買ひつけてある本御新倫敦に近くの文物屋へ、赤ビロードや[illegible]に這入って行った。

「値段ばかし高くして、高いのはそれだけ閑

値が高く、なってますから、ここ、これなぞは、切れ味は保証します。ヘンケルと云へば、猫連でも有名な会社ですから、こいつの品物だと間違いはありませんよ」

主人に勧められて、歯とは丁度半分位の四角だが、成程切れ味はいとゞ好さうに見える小形のを買つて、早く使つて見たくつて、なんとなく子供らしく躍るやうな気持で下宿に帰つて来たが、ふと玄関の柱の時差しの中の下宿人の郵便物の間に、御里の妻からの手紙を見出して、ふくらみ切つた風船の球にプツと針でも刺されたやうな気持を感じた。

あせいは、自分の晩酌の肴の野菜物でも捜しに行つたかして、留守だつた。妻の手紙は、彼是、いと月ぶりだつた。

日増寒さがよくなりました。其後は如何過ごされて居りますか、お伺い申上げます。富山では皆々無事で御座いますから、失礼な

から御安心下さいませ。

さて其後、早速手紙で申上げるべき處重ねてのことゝて何と申上げていいやら私にはとても手紙は書けなかつたのです。あんなにまで勉強をしてゐ出来ないとは、どうすることも出来ません。ほんとに私の子供は運がまだ来ないのだと諦めるほかないのです。それでも平均は八十五點なのですが、高等二三年から受験生はその内から點を引くことになつて居るので九十點以上でなければ駄目なのです。東京から我つも中學はありますがそれも思あまりになりません。ほんとに私どんなに氣の毒だがわかりません。

これからの人は、せめて中等教育だけでも受けさせないと、困るではありませんか。他に何とか方法がないのでしやはり高等三年に入れて、来年はまた何とかするつもりです。子供等は皆私に似て出来が悪いのです。あなたう。私この子ばかり憎みなのです。

は私を飽くまでも苦しめるのです。……私は未にどうなるのでせう。あなたに投げ出されるのでせうか。私にはどう考へていゝかゝりあかりませんが、唯々私はかなしくなります。……あなたどうぞおせいきんを大事にしてやって下さい、かなしい思ひをさせないで下さい、おせいさんをいぢめないで下さい、あなたにあのまゝにいぢめられてどんなに辛いことでせう。可哀相です。今に彼さんもお産れになるのですから、

大事にしてやって下さい。……あなたもどうするお考へですが、もっと働いて下さらないと實に困ります。……此第の暮れお出での節、あんなにまで言はれたことを、私とても忘れることは出来ません。ですが、長いこの先きも私の心は決して人に恥入るやうなことは致しません。思へば思はどかなしう侍ります。……私の年齢を見ておせいさんをいぢめてはなりません。どうか彼たちや私のことはお

忘れにならぬやうにして下さい。おひまが
待遠いましたらお手紙をおして下さい。私
はあなたのお便りを楽しみに待って居ります。
いろ〳〵とつまらぬことを書き並べし
お気にさわりましたら幾重にもお許し下さい。時節柄体大切に遊ばされる様お祈り申上げます。

四月十六日

粗末な用箋に、ペンで書きなぐったいつも
の乱雑な妻の手紙ながら、一言一句、悉く
自分には身に覚えのある、昔貴の筆だった。
妻はこの月初めに發表した、おせいとの生活
を書いた自分の小説も読んでゐるのだ。それ
に、自分は寧ろ彼の健康上から、そんな無
理をしてまで中學なんかやらせなくもいい、
この月末頃までには相談に歸るから、そ
での間家の居い者の手傳いに畑へでも出して
置け——高等は二年きりと思ってゐたので、
唯だう〳〵遊ばして生活費にさしてはいけな

いと思つて、それで多分の落第の電報が来た時手紙で云つてやつたのだつたが、そんなことも彼女の心を強く傷つけたのだつた。

―

飽くまでも苦しめるのです―十七年間の結婚生活の間に、これほどの強い意味の言葉を、自分は妻から受取つたことはなかつた。

「何かしら、暗い悲劇の夢が、二人のうちのどちらかに関り始めるんじやないか知らさ……」

とそんな気もされて来て、自分は手紙と剃刀を机の抽斗の奥に蔵い込んで、机の上に肘を立て、両掌に前頭を支へて、ぐつたりした姿勢になつて目を瞑つた。

―十三年四月―